“失った四人”が心に灯す小さな火～劇団こふく劇場『ロマンス』を推す理由

編集者：大堀久美子

劇団こふく劇場 第 16 回公演「ロマンス」三股公演(撮影：税田輝彦)

2020 年の終わりから 21 年末までのほぼ丸一年の間に、筆者は 6 作、劇団こふく劇場・永山智行が劇作か演出、あるいは両方を手掛けた作品を観ている。

05 年に東京国際芸術祭のために提供した戯曲に新たに筆を入れ、劇団員に加えて 6 都市から 7 人の客演俳優を迎えた劇団公演『昏睡』。福島の公立ホール・いわきアリオスの事業をきっかけに、地元の三女優と演出家が旗揚げしたユニット・微魔女企画に 19 年に書下ろした『おかえり』の再演。永山氏が福岡と宮崎出身の俳優女男二人と組んだユニット・ひなた旅行舎の作品で、感染症禍のため延期上演となっていた『蝶のやうな私の郷愁』(松田正隆 作)。京都の演劇ユニット・このしたやみに書下ろした、内田百閒の小説をベースとする『猫を探す』(山口浩章 演出)。大阪、福岡、熊本の三女優のユニット・yum yum cheese！に「80 代になっても演じられる作品を」と乞われて書いた『いきたひと』(和田喜夫 演出)。そして、自身の劇団では 6 年ぶりの新作となる『ロマンス』。

ここに加え、永山氏がプロデュースやディレクションを手掛ける宮崎県国民文化祭関連企画や、こふく劇場の学校公演作品『カチカチリンカリンカ』、『蝶のやうな～』と同じ理由で時期を移し 2 年ぶりに開催された劇団のホーム・宮崎県三股町の町民を主軸とした演劇フェス「まちドラ！」などもあり、観ること叶わぬものもあったが、それでも 2 カ月に一回以上は氏の創作に向き合う機会があったことになる。いわば永山作品のヴィンテージ・イヤー（当たり年）だったのだと、振り返りながら思い至った。

『ロマンス』は、そんな一年の終わりに近い 21 年 10 月末、こふく劇場のホームである三股町立文化会館で幕を開けた。出演者は劇団員のみの 5 人。元郵便局員で現在は大型施設の駐車場などで誘導係をする石田雄造、一人で小料理屋を切り盛りする森下薫子(のぶこ)、石田が所属する会社で働く元村さと美、少々生き迷っている青年・芹生(せりお)久、そして“声の木”と名づけられた今作を見守る存在。

永山が、こふく劇場でつくる作品は独特のスタイルを持っている。5 人の俳優は、それぞれ自身の持ち役を演じるだけでなく、一般的な戯曲でいうところの「ト書き」を一人、あるいは複数人で発語し、また場面が変われば持ち役以外の役にもなり替わる。

発語は、通常の会話の抑揚とは異なった、どこか歌うようなテンポとリズムを持ち、また劇中には懐かしい歌が洋の東西を問わず散りばめられていることが多く、『ロマンス』も例外ではない。舞台の一隅に、打楽器や小さなギターなどが置かれたスペースがあり、俳優たちはかわるがわるそこで演奏や効果音を奏で、それに合わせて別の俳優が歌う。それら音楽的な言葉には、古典芸能の、狂言師のようなやや腰を落としたすり足で移動する身体が寄り添っている。声と身体を絶妙に操り、この、独特の演技体を劇中で遂行する俳優たちの制御力には、いつも惚れ惚れする。

とは言えこう書くと、いかにも生硬い解説文のようになってしまうが、声と言葉、身体と所作は柔らかく溶け合い、こふく劇場の作品に向き合う観客は、波長が合えば日常とは少し違う空気の流れに包まれながら温浴するような感覚になれる、と筆者は思っている。作品がもたらす体感は心地よいが、劇中紡がれるドラマはとても深く、「生きていること」を考えさせられることが多い（これも、個人的な感想ではあるが)。

『ロマンス』で言えば、登場人物たちは誰もがその生死に関わりなく、大切な人の「不在」を抱えながら暮らしている。そして、その暮らしは朝起きて最初に飲む一杯の水や、料理本のレシピを一つずつ作ってみることや、家族や近隣の人々と交わす何気ない会話や、亡き人との想い出から成り立っており、それらありふれたことの集積が、だからこそかけがえなく愛おしいと永山作品は語りかけてくる。

あるいは必ず来る「終わり」や不意に訪れる「始まり」に、まるで世界に踏み出したばかりの小さな子どものように心揺らし、感情を溢れさせる永山作品の登場人物たち。その姿を追ううち、観る人の視点はいつの間にか遥か高みへと引き上げられ、遠く命の起源に視線を注ぐような精神的な旅へと促されていくのだ。

さて、いくら言葉を費やしたところで演劇は“百聞は一見に如かず”なもの。観ていただ

く、感じていただくのが一番だ。明けて 2022 年 1 月半ば、宮城県仙台市の舞台芸術のメッカ・せんだい演劇工房 10-BOX での『ロマンス』は、こふく劇場の宮城への初お目見えでもある。彼の地の住人にとっても寒さ厳しき折とは知りつつ、是非ご来場・ご観劇をいただければ嬉しい限り。また続く 2 月頭は、これまた四国の演劇人の心の故郷ともいうべき松山・シアターねこでの公演。これが、『ロマンス』の旅の、一旦の終着点となる。

過去を悔いるからこそ「明日」が来ることを切実に望む初老の男、想い出に区切りをつけることで一歩を踏み出す中年の女、別れを経験したからこそ幸せに手を伸ばす若い女性、世間とのズレにもがきつつも前を向く若者。そんな、貴方の隣りにもいそうな 4 人と、その心に寄り添う“声の木”が紡ぐ物語はきっと、観る人の心に小さいながらもあたたかな火を灯すはずだ。

//

劇団こふく劇場 第 16 回公演『ロマンス』　　特設サイト

作・演出=永山智行
出演=かみもと千春、濵沙杲宏、大迫紗佑里、有村香澄、池田孝彰

//

【仙台公演】
日時：2022 年 1 月 15 日（土）18:00 開演
　　1 月 16 日（日）14:00 開演
会場：せんだい演劇工房 10-BOX　box-1
チケット：
一般：2,500 円（当日：2,800 円)、U25 割（25 歳以下）：1,500 円（前売・当日とも）
ご予約：https://www.quartet-online.net/ticket/romance-sendai

【仙台公演プレイベント】

「演劇がうまれる」詳細

日時：1 月 1 2 日㈬18:30～21:00
会場：仙台演劇工房 10―BOX

＊入場無料➡お申込みこちら

【松山公演】2022 年 2 月 5 日（土）・6 日（日）　@シアターねこ